



第 15 回 文京区医師会学術集会 抄録

平成 29 年 2 月 25 日 (土)

於 文京区医師会館 1F ホール

第 I 部 座長： 山道 博 (医師会) 新井 悟 (薬剤師会)

1. 「増加している梅毒の診療について —2016 年のガイドラインに沿って—」

細部医院 ○細部 高英

昨年 4 月の性の健康という雑誌に「Stop The 梅毒」という記事が掲載された。数年前から梅毒が増加しており、2010 年の 6 倍の報告数になっている。梅毒は男性同性愛者 (MSM) の HIV 感染に合併することは知られていたが、最近では異性間の感染経路が特徴的で、若年女性の増加が目立つ。妊孕性のある若い女性の梅毒は今後、先天梅毒児の出産の増加につながる。

コンドームだけでは予防できず、無症候梅毒は全報告例の 40% で、有症状の顕症梅毒も無痛性潰瘍やリンパ節腫脹などで自然消褪してしまうため、受診機会が遠のき病期が進んでしまう。

医療従事者はもとより、一般的に「梅毒は昔の病気ではない！」ことを知り、梅毒を再確認していただきたい。

性感染症ガイドライン 2016 に沿って、梅毒のおさらいと当院での症例提示、梅毒の歴史的雑学を紹介する。

2. 「運動器検診に関する養護教諭へのアンケート調査」

本郷整形外科 ○金 吉男 齊藤整形外科 齋藤 勝之

【目的】平成 28 年度より始まった運動器検診に関するアンケート調査を小中学校の養護教諭に行ったので報告する。【対象と方法】区内小学校 20、中学校 10 校の養護教諭に対し、保健調査票に関して、回収率、手間、チェックに掛かる時間、検診結果に関しては専門医受診中の数、調査票での各症状の陽性数、校医の検診後専門医受診となった数を調査し、またその他自由意見の聴取を行った。【結果】小学校の 14 校 (70%) 中学校の 8 校 (80%) から回答が得られた。回収に掛かる時間は小中学ともに大変である、との回答が多く、また調査票のチェックに要する時間は小学校で長い傾向にあった。専門医受診中の数は中学でやや多かった。症状別では側弯疑いが調査票で小中学とも男女で多いが、中学女子で要受診率が高かった。調査票では中学男女とも踵を付けてのしゃがみ込みができない数が多く、約 1/4 で要受診であった。その他の症状においては調査票での陽性率は低かった。【結語】検診結果と養護教諭からの意見から、今後の検診方法の改善と、全ての項目および毎年の検診意義を検証する必要がある。

3. 「当クリニックにおける認知機能評価およびリハビリ訓練の状況」

駒込かせだクリニック 言語聴覚士 ○関口 相和子 院長 加勢田 美恵子

我が国は高齢社会を迎え、認知症患者への対応は喫緊の課題となっている。当院でも認知症に関する診療依頼や相談件数は年々増加しており、机上の検査を含めた評価やリハビリテーションの処方件数も徐々に伸びている。当院では、平成27年から本格的に外来S Tリハビリとしての認知機能検査や訓練を開始し、平成27年1月から平成28年12月までの2年間に於いて、25名で認知機能に関する評価・訓練の依頼があり、ひと月では平均28単位（リハビリ1単位20分）実施した。本研究では、①直近1年間の認知リハビリ患者の傾向、②当院での認知機能検査や訓練に関するシステム作りの取り組み、③最近の認知症に関してのトピックス、を中心とし、認知症患者とその家族が安心して生活できるような支援をするための、当院での取り組みの現状について紹介する。

4. 「文京区薬剤師会ブラウンバッグ運動の中間報告」

文京区薬剤師会 スエヤス調剤薬局文京店 ○島田 淳史

ブラウンバッグ運動とは、患者が日常的に服用している処方せん薬、OTC薬、サプリメント等を薬局に持参してもらい、副作用や相互作用などの相談や残薬確認を行うプログラムである。平成28年度調剤報酬改定において、「対物業務から対人業務へ」というテーマが挙げられ、薬局薬剤師は残薬確認を行い、患者の服薬支援や処方の見直しを医師に提案するなど、積極的な介入が求められている。高齢化社会における残薬問題は深刻であり、残薬解消により医療費削減及びアドヒアランス向上、さらには安全な医療の提供に繋がるため、文京区薬剤師会では残薬の現状確認と有効活用による医療費削減の取り組みを目的としたブラウンバッグ運動を行った。薬局でお薬相談バッグを患者に渡し、次回来局時に残薬をバッグに入れて持参してもらい残薬確認を行った。集計期間は2016年9月から2017年8月までの1年間を予定しており残薬の活用分と廃棄分の薬価を示した。

5. 「平成28年度調剤報酬改定後の薬剤師の動向について」

文京区薬剤師会 白山駅前薬局 ○川田 真二郎

【背景】平成28年度の調剤報酬改定により、薬局のあり方が見直され、患者本位の医薬分業が求められている。【目的】薬局のあり方を見直し、医薬品の使用を適正化する。地域包括ケアのチームの一員として、薬局の薬剤師が専門性を発揮。患者の服用薬について一元的・継続的な薬学的管理を実施し、多剤・重複投薬の防止や、残薬を解消し、患者の薬物治療の安全性・有効性を向上、医薬品の使用の適正化につなげる。【方法】かかりつけ薬剤師・薬局を活用、処方医と連携して服薬状況を一元的・継続的に把握することの評価。お薬手帳の充実化、ブラウンバッグの活用、長期処方では分割して対応。また、在宅業務を推進し、対人業務を評価。後発医薬品の推進や門前薬局の見直しをはかり、地域で活躍する顔の見える薬剤師を評価する。【結果】対物業務からの離脱、対人業務へとシフトしていく。地域包括ケアのチームの一員として薬剤師がその専門性を発揮していく。

第Ⅱ部

座長： 松岡 愛子（訪問看護ステーション） 依田 泰（歯科医師会）

6. 「West 症候群の患者が職種連携により経管栄養から経口摂取可能となった1例」

株式会社 DDO ゆい訪問看護ステーション ○田島 百々子 布川 麻代 嶋田 有紀

在宅医療におけるサービスが多様化する昨今では、医療機関や在宅医をはじめ、訪問歯科医・訪問看護師・薬剤師・ケアマネージャー、その他多職種との連携が、スムーズで満足度の高いサービスの提供につながる。以前は医療機関で受けられたサービスも、近年では在宅療養が可能と判断され、通院や訪問診療と合わせて、訪問看護・訪問介護を導入し在宅にて安全・安心に生活を送れるよう、多職種による介入が重要である。認知症やリハビリテーションなどの高齢者医療のみでなく、終末期・難病・小児・精神など医療依存度の高い利用者も、積極的に在宅にて支援が行われるようになってきている。

今回、生後7か月でWest 症候群を発症し、その後遺症のため在宅にて生活していた43歳男性が、肺炎・上気道炎の発症で入院し、同時に経口摂取困難となった患者に対し、多職種連携により経管栄養から経口摂取が可能となった一例について報告する。

7. 「チームで支える認知症高齢者のケースについて」

セコムとしま訪問看護ステーション サテライト春日 ○佐々木 純

【はじめに】認知症施策では、かかりつけ医や居宅サービス、市民などがチームとなって支援することが期待されている。当ステーションで関わっている、ある認知症高齢者のケースから、チームが形成されるまでの経過を振り返り報告する。

【事例紹介】A氏 88歳女性 アルツハイマー型認知症、高血圧、脳動脈瘤
独居。頼れる親戚は、遠方にいる。膝痛や高血圧でB医に通院していた。もの忘れがあり、頭部CTにて海馬部の萎縮を認め、アルツハイマー型認知症を診断された。1年前からもの盗られ妄想が強く、度々警察へ行くようになり、近隣の人とのトラブルも増えていた。他者の介入を受け入れない状況であった。

【介入の経過】B医が、血圧上昇をきっかけに訪問看護の導入を勧めた。訪問看護師が顔見知りの関係となり、徐々にA氏を支援するチームができてきた。

【まとめ】A氏が、今後も住み慣れた環境で生活を続けられるように連携をとっていきたい。

8. 「足趾機能に変化を及ぼす要因」

ナースステーション東京 新宿事業所 文京サテライト 理学療法士 ○鍵屋 民地

【目的】要介護者の足趾変形の回復要因を調べること。【調査方法・内容】当事業所で訪問リハビリを利用している5症例に対し、1.「日本版 成人・高齢者用アセスメントとケアプラン」の11項目について調査した。2.「平成27年高齢者の日常生活に関する意識調査結果」の7項目についてアンケートを実施した。3.立位バランスの測定と足裏接地面の測定をした。【結果】1.2.より、症例1、5は、障害高齢者の日常生活自立度が高い、体重の増加がある、ADLの自立項目が多い、麻痺や拘縮が見られない、生きがいがある、近所つきあいがある、親しくしている人数、外出頻度が多いことが判った。3.より、症例1、3、5は、立位バランス、足裏接地面に改善がみられた。【考察】足趾機能の回復には、早期介入、栄養状態や運動の充足、家族や友人の支え、地域社会とのつながりなどが要因と考えられた。今後、在宅の視点における有用なリハビリ介入を検討する必要がある。

9. 「なぜ子ども時代の矯正治療が必要か —8020 研究のフィードバックより—」

白山きりん子ども矯正歯科 ○茂木 悦子

文京区歯科医師会と東京歯科大学の共同調査（1996, 2000, 2005 年）から、80 歳で歯が 20 本以上残っている人、いわゆる 8020 達成者は咬み合わせが良いことがわかっており、咬み合わせが良いことは歯を数多く残す要因の一つです。

今日、矯正治療は患者さんの一生のどの時代でも対応できる治療となってきましたが、8020 達成者がどのような道を辿ってきたかをフィードバックすると、幼い時代に、食べ物の嗜好が形成され、同時にアゴの発達が促されたものと考えられます。

そこで、アゴが小さい、歯がなかなか出てこない、咬み合わせが悪い、口を閉じられない、などの問題を抱える今の子供たちに対して、歯科矯正治療を早くに介入させることで、より効率よく、より負担が少なく、より高い効果が得られることをお話ししたいと思います。この対応は 8020 達成者と可及的に同じ道のりを歩むことに繋がり、親からのプレゼントといえるでしょう。

10. 「医科歯科連携により効果的な診断治療を得られた 1 症例」

中島矯正歯科クリニック ○中島 榮一郎 とくなが耳鼻咽喉科 ○徳永 雅一

この学術集会の大切な目的の一つは医科、歯科、薬科、パラメデカル間の情報を密にして患者にとって無駄がなく、より効果的な診断、治療を可能にすることであろう。

この患者は 3 年前に顔面神経麻痺を発症し、某大学病院を受診、完治したという。その後病的共同運動や拘縮の後遺症の治療の為に関連の病院にて理学療法を受診したが、左側眼下垂や呼吸時の閉塞性の違和感を訴えたため、担当の理学療法士から当院を紹介され来院された。

初診時の問診で、呼吸時の閉塞性の違和感を訴えたので、徳永耳鼻咽喉科に診断、加療を依頼したところ、ファイバースコープに加え CT での所見でも異常が見られなかった。眼瞼下垂については形成外科での手術を少し待ってもらい、PNF を 3 ヶ月間施術することとした。呼吸時閉塞感については口腔内にレジン製のバイオテンプレート装着し、顎関節頭を下前方に誘導し、耳介側頭神経の圧迫を軽減した。また、舌骨下筋群の PNF と呼吸指導を行ったところ、症状が緩和した。通常の PA での X 線でも術前に見られた上顎洞、前頭窩、篩骨窩などの不透過像が軽減した。

平成 29 年 2 月 25 日 文京区医師会 学術集会 抄録

主催：文京区医師会

共催：文京区歯科医師会・文京区薬剤師会・訪問看護ステーション連絡会